

### 平成 29 年 10 月 1 日 発行 第 22 号

目次				
<b>巻頭言</b> 初心に帰って				
陶芸家のひとりごと	谷口	良孝		1
穴窯焼成の準備と	14 HJ-	<del>+:</del>		
八黒焼成の準備と		•		1
陶芸道中いざ凝り気				
私の陶芸人生のふ	りか	えり		
	宮崎	薫 …		6
私の作品自慢				
焼き物と人生色々				
	貝本	龍司		8
陶芸技術ノート				
ダミの仕方				
一下絵付けの色を	を塗る	技法-	_	
	杉山	雅基		11
展覧会見聞録	,	—		
ボストンと日本美術				
		眞正		13
活動報告	, , , ,			15
会員便り				16
編集後記				17
付録 会報 投稿のし	おり			18
	,,,,			10
編集委員会 委員長 今井 眞正 悉昌 公口 自考		一份字	- 梅口洁	<del>_</del>

# 卷頭官

# 初心に帰って

## 副会長 谷口 良孝

今年度から副会長をしています谷口良孝と申します。京都・やきもの倶楽部が明るく楽しい会になりますように頑張って行きますので、よろしくお願い致します。私自身も皆様との交流を通じて勉強をさせて頂いております。

会員の皆様の作品は本当に陶芸が大好きで、楽 しんで制作されているのが伝わってくる作品ばか りです。私も皆様と一緒に作品展に出品させて頂 くなかで、この仕事を志した初心の気持ちを少し 忘れていた気がします。作品展会場で、会員の皆 様の作品を前に、皆様が笑顔でお話しをされてい る姿を拝見させて頂きますと、本当にやきものが 好きで良い作品を制作したいと思う気持ちが伝わ ってきます。

物作りとして一番大切な事を、やきもの倶楽部の会員の皆様を通じて改めて勉強させて頂いております。11月開催の作品展でも、楽しく笑顔の出る作品と出会えるのを楽しみにしております。

# 陶芸家のひとりごと

# 穴窯焼成の準備と後始末

陶芸家 森田 隆司

まず始めに、穴窯焼成に作品参加、窯詰め、窯 焚き、窯出しの手伝いをしていただいたやきもの 倶楽部会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

前回の穴窯焼成から9年が経ち、体調の具合も 心配なく(体力はあきらかに落ちていますが…)、 「窯焚きのときは徹夜で番をしてあげるから、森 田さんは夜寝てください」と言ってくれた方もあ り、穴窯焚きの決心をした次第です。

特に、薪で焚く窯の経験のない会員に向けて綴ってみます。電気窯、ガス窯のように手軽に焼けるものではなく、準備、窯詰め、窯焚き、窯出し、後始末と総てにおいて時間と手間と人手のいる作業だと知っていただければ幸いです。

### 1月 準備スタート

作品参加希望者用に 10 年寝かせた黄瀬土と赤土 700 kg を土練機で土合わせと硬さの調整をおこなう。



土練機で土合わせ

1週間に 2 度、40 cm の積雪があり、穴窯焚き口上の屋根が雪の重みで倒壊。アア唖然、よりによって窯焚きをする年に……、 意気消沈。



雪は怖い

### 3月 ウグイスが鳴き始める

屋外で作業が出来るほどの暖かさになり、あぶり用廃材をチェーンソーで適当な長さにカットしていく。



一人での作業は、はかどらない

### 4月 サクラが咲く頃

毎回、窯焚きを手伝ってくれている長尾さん(綾部在住)が屋根の倒壊を聞き、駆けつけてくれました。まさに天の助け。彼は工事用足場の鉄パイプをちゃちゃっと組上げ、見事、いとも簡単に屋根を作り上げてしまいました。足場のパイプとは考え付かんかった。



屋根を作る長尾さん

軽トラ2台で松の割り木200束を買いに丹波立杭へ。 前回残った100束とで計300束、これだけあれば、まず足りなくなる事はない。ちなみに、割り木1束380円。割り木屋のおっちゃんの話、「秋に切り出した割り木を冬の雨と雪にさらしておくと、カメムシなどの虫が付きにくい」らしい。



丹波立杭で見た割木の乾燥風景

工房に入りきらないほど作品が続々と届きだし、 気持ちがだんだんと穴窯焚きモードになってくる。 「あれもせな、これもせんと」とあせりつつ、身 体はひとつと言い聞かせ、目の前の作業をこなし てく。



窯の焚き口作り

棚板にコーティング剤を塗布し、ツクと共にサイズごとに分けておく。

- ・道具土でハマ、メを作る
- ・アルミナ入り糊の用意
- ・赤貝、ホタテ貝等の貝殻の用意



棚板にコーティング



茶碗、ぐい呑み用 ハマ

窯の周りの雑草刈り、煙突周りの枝払い。消防 署に窯焚き日程届出し、許可が出る。最寄の交番 に日程を提出。以前黒煙が出ていると交番に通報 があり、警官が飛んで来た事があった。



枝払い

買出しに行く。純綿の軍手2ダース(ナイロン入りは薪を入れる時に熱で溶ける)、食料(レトルトカレー、カップメン、パックご飯、お茶等)インスタントに出来る物4日×5人分。窯詰め日の昼食弁当15名分注文。これだけ気を遣っても抜け落ちている事が沢山ある。

前回の窯詰め、窯焚き、窯出しの詳細は、会報 「炎」2号に掲載しているので、ご参照ください。

#### 5月 穴窯焚き本番

### 窯詰め

朝早くから 20 名程手伝いに集まって下さった。 前回は最後まで窯の中での作業が出来たけれども、 今回は半分詰めたところで腰痛、足がつり、わき 腹がつりでどうする事もできず、リタイヤ。理事 の市川氏に残りを詰めていただいた。年齢には勝 てませんねぇ。



窯の中の市川氏

外では材木を切りそろえてくれる人、薪を1ヶ 所に積み上げてくれる人、焚口周りに寒さよけブ ルーシートを張ってくれる人など、段取り良く作 業を進めていただいた。



窯詰めを待つ作品



一ヶ所に積み上げる薪リレー

## 窯焚き

倶楽部の方に窯番当番表を作っていただいたお 蔭で私は疲れもなく充分睡眠を取ることができた。

窯焚きの楽しいところは、薪をくべながら色々な話ができる事で「温度を上げるには」「入れる薪の量は」「燠(おき)が溜まったら」「還元の時の薪を入れるタイミング」等の技術的な事から「コーヒーのおいしい入れ方」「蕎麦の美味しい店」「あの店のママは綺麗」とか……。

ゴールデンウィークの渋滞にもかかわらず、手 伝いに来てくれた皆様、ありがとうございました。 順調に温度が上がり、最高 1250 ℃と予定より早 く 90 時間で窯焚き終了。



誰ですか、腰が引けてますけど



窯焚きの職人さんみたい



誰? このゴッツイ人 会長さんや!!

#### 窯出し

窯が上がってから1週間が経ち、手伝いに集まってくれた人は20名程になる。

窯横の出入り口のレンガをはずし、中を覗く。 全員の胸のドキドキ音が聞こえてくるのが感じと られる。窯から次々に作品が取り出され、記録の 為に棚ごとに撮影する。火前から後ろまで良く焼 けたと自画自賛する。



火前の作品



棚板ごとに記録撮影

### 道具の後始末

窯から出てきた棚板やツクは灰が被ったり、釉がタレたり、道具土が引っ付いたりしており、その部分をグラインダーで削り取り、次の窯に備えてサイズ毎にまとめて片付けておく。

午後4時頃諸々の作業終了。皆さんそれぞれ家路につかれ、工房に我1人なぜか涙が滲んでくる。



棚板・ツクの片付け準備

## 作品の仕上げ

高台に付いた道具土、流れた釉を本体にキズを つけないようにグラインダー、リュウターで丁寧 に削り取り、ざらつきが無くなるまでサンドペー パーをあてて仕上げる。 壷は水が染み出てこない ように水止め液を塗布する。



作品の仕上げは丁寧に

1月から準備を始めて5ヶ月、山あり谷ありの 紆余曲折でした。手伝っていただいた方々には気 遣いの足りなかった事、コミュニケイション不足 など多々ありましたが、事故も無く窯焚きを終え る事ができました。関わっていただいた総ての方 に感謝いたします。

# 陶芸道中いざ凝り気

# 私の陶人生のふりかえり

会員 宮崎 薫

今年7月、65才の誕生日を迎えた。人生の節目のこの時に原稿依頼をいただいた。自分の陶人生を振り返ってみる良い機会をいただいたと思った。

私が土に触れる様になったのは、新米の小学校 教員の時。陶芸クラブの顧問をする事になったからだ。子ども達は思い思いに作品を作り楽しそうにやっていたが、陶芸クラブなのに電動ろくろがない。学校に無理を言って、電動ろくろを買ってもらったのはよいが、子ども達にこれを使って指導しないといけない。初めて手にしてすぐに扱えるような物ではない事を初めて知った。時間を見つけては、ろくろに向かって悪戦苦闘。師匠は図書館にあった陶芸の本。それも小学生向け。指導なんてあきらめて、「みんな、ろくろを使って好きに作って遊ぼう~」だった。これが良かった。グチャグチャになりながら、おもしろい作品?ができた。私も子ども達と一緒。これが陶芸を始めるきっかけになったのだ。

学校には楽焼き用の灯油窯があったが、薪で焼くとさらに面白くなると思い、子ども達と薪窯造



子ども達の共同制作 『サイ』

りに挑戦する事にした。学区内から赤土や瓦を集め、運動場の端っこに小さな窯を造った。ろくろと同様に何の知識もないままの築窯?だったが、子ども達も目を輝かせて造った。自分たちで築いた窯で焼き上がった作品を見たときの嬉しそうな顔、さらに満足そうな顔・顔・顔・・・・・あの感動は忘れることはできない。私の原点はそこにあると言っても過言ではない。

子ども達のグループ制作"サイ"は今も我が家 のギャラリー入り口に鎮座している。

土ひねりの楽しさにはまった私は、暇を見つけては器を作るようになった。転勤で実家に戻ってからは、灯油窯を購入し、さらにはまっていった感じがする。しかし、独学での作陶なので、技術的にも未熟で重い器ばかりだった。その頃、たまたま京都で修行され、近くに築窯されていた陶芸家の方と知り合い、時折出入りするようになり、色々話を聞くことができた。といっても作陶や技術的な話はほとんどなく、海外での出来事や人生観などだった。しかし、登り窯の窯焚きに人手が足らないからか、よく声が掛かった。この窯焚きが私にとって、後の登り窯築窯に結びつく、大きくすばらしい経験になった。

土ひねりの勉強をのんびり基礎からしてみたい との想いで、4年早く退職をした。この時、先ほ どの陶芸家の先生はすでに故人となっておられ、 残念でならなかった。生きておられたら私の陶人 生はずいぶん変わっていただろうと思う。

時間は十分にあり、田や山の仕事をしながら作陶をする悠々自適?な生活が始まった。そうこうしている内に、「物作りをしている5人で古民家に店を出さないか」と声をかけていただいた。3年間という短い期間だったが、「趣味は趣味でも良いが、使っていただくのに恥ずかしくない物作りをしないといけない」と強く思うようになった。この気持ちが技術的に少し成長させてくれたと自分としては思っている。また、店に来て下さった方から作品の善し悪し等のストレートな意見や感想をいただいたことで視野が開け、それから後の希望と知識となった。その頃から山仕事はできなくなってしまった。

店と平行するように、地元の仲間達から「自分 たちで薪窯を造ろう」という話が持ち上がった。

窯といっても「登り窯」か「穴窯」か、少し迷った。それぞれに一長一短ある。本来は「自分の目指す作品」に合った窯だろうと思うが、それ以上に優先させたいものがあった。それは、「みんなが窯に集い、楽しめる窯」だった。みんなが作品を作り、窯入れし、ワイワイと窯焚きをする。こんな窯が夢だった。

窯がたとえできても、かなりの量の薪が必要になるし、窯焚きの人の協力はどうなるだろう、と言う心配はあった。しかし、薪については、山に切り捨てになった杉や檜がたっぷりある。その木をみんなで引っ張り出して、薪割りもみんなでやれば十分準備できる。火力は松の方がいいかも知れないが、杉や檜でも大丈夫だと判断した。また、窯焚きの人は、作品を作った人や薪窯を造ろうと言った人達の協力で何とかなると判断した。少々甘い判断だったかも知れないが、穴窯よりも人も薪の数も多く必要とする登り窯の方をやりたいと耕りがといる。さらに今から考えると、それまで自分が経験していたのは登り窯だったからというのも判断に大きく影響していたのかも知れない。

半年程かけて、岡山県内を始め島根・鳥取・兵庫県等の窯元を訪ねた。信楽窯業技術試験場でも話を伺う事ができた。どこも飛び込みで見学等させてもらったが、それぞれ親切にアドバイスをいただく事ができた。その後、構想を練り、設計図を描いた。結果的に故人の陶芸家の先生の窯をベースに備前焼の窯を参考にした図面になった。

「自分たちでできる作業は自分たちでやろう」という仲間が暇々に集まって、山から木を切り、引っ張り出して建屋の材料を用意した。仲間の中には、今まで町で暮らしていて山に入ったのも山仕事をしたのもこれが最初という人もいた。厳しい仕事をしてもらっていたが、「山仕事は気持ちいい」と言う言葉で救われた。レンガも自分たちで見様見まねで積み上げた。素人ばかりの集団が積んだレンガだから、曲がったり寸法が違ったりは当たり前。幅2メートル、奥行き7メートル。燃焼兼作品焼成の1室と他に2室の計3室の登り窯。みんなで山仕事を始めてから1年足らずで完成させた。今まで12回窯焚きをしたが、崩れる

事なく立派に活躍してくれている。この仲間の中で作陶をしていたのは、私以外にあと1人だけ。 感謝してもしきれない人たちだ。経費はほとんど 材料費だけでできたのも、感謝、感謝である。

そして、関わってくれた多くの仲間達も集まっての初めての窯焚き。

試行錯誤の3日3晩だった。窯の癖が分からない。私の持っている知識は知れた物。悪戦苦闘。 温度が上がらない。予定していた終了時刻をオーバー。薪がもうない …… それでも何とか3室の内2室は焼くことができた。今から思うと、「初窯はそんなもんだ」なのかもしれないが、その時は参った。窯焚きの様子を見て、息子が、「おじさん達が、真剣に、青春していたよ」と妻に話したらしい。うまいこと言ったものだ。まさに、仲間と熱く、暑く、語り合った青春そのものだった。

年 2 回の窯焚き。なぜ 2 回かというと、80 才までに年 1 回だと 20 回しか焚けない。年 2 回焚けば 40 回焚ける。という単純な発想からだ。



仲間で造った登り窯

薪割りや薪運びで非常に助かっているのは、幼稚園や小学校の子どもを持つお母ちゃん達。子どもが幼稚園等に行っている間に作業をしてくれたり、時には子連れで参加してくれたりする。また、原木が多い時には、日曜日に男性軍の応援を得て薪割り。当初は、山に行って切り捨ての木を集めて薪にと思っていたが、「木を切ったから取りに来い」「持って行っていいか」等の声で、全く山に行かずともたくさんの木が集まった。とても1人ではできない作業量。おかげで窯の周りには約

3年分の薪の山ができている。薪の種類は、杉、 檜、松あり、雑木から家の廃材まである。窯焚き に来てくれる人達に言うのが、「うちの窯に来て 薪の文句は言うな、扱い方だ」ということ。みん なで苦労して用意した薪、大事に、もったいない と言う思いで使っていきたい。扱い方でどんな木 も十分使える。

窯焚きが終わってすぐ「次はいつ焚く?」「手伝う事があったら言ってくれ」等々たくさんの仲間や友人、知人。こうした多くの人に支えられ、支えられて、はや7年。都合で秋にしか焚けなかった年が1回あったが、他は年2回の窯焚きをキープしている。

案焚きの度に欠かさずに来てくれる人が、7~8名。時々参加が数名。初めての参加者が毎回2~3名。作品を窯に入れている人が数名。このような人達(素人集団)によって3~4日間の窯焚きを行っている。1回の窯焚きで実人数15~20名。夢だった「みんなでワイワイと窯焚きをする」ということができ、嬉しく思っている。ただ、当初考えていた自分の作品を窯入れして、窯焚きをするという人がまだ少なく残念に思っている。

窯焚きに来た人からは、「火を見ていると癒やされる」とか、「ここに来るといろんな職種の人がいて話が面白い」とか、「こんなにガンガン火を燃やして、贅沢な空間や」等、いろいろな感想が聞かれる。「みんなが窯に集い、楽しめる窯」を目指しこれからも頑張りたい。

を燃やして、贅沢な空間や」等、いろいろな感想が聞かれる。「みんなが窯に集い、楽しめる窯」を目指しこれからも頑張りたい。

焚き口からの景色

一度の窯焚きで多くの作品が出てくる。ケース に入れて積んでいたのでは、窯焚きしてくれた仲 間に申し訳ないし、皆さんにも見てもらえないと いうことから、自宅の蔵をリフォームしてギャラ リーにした。オープンして4年、細々と続けてい る。

「自分の能力を知らない」「後の事は考えていない」「したい事はすぐ行動に移す」今回思い返すと、これはまさしく行き当たりばったりで、身勝手な陶人生と言ってもいいと思う。しかし、これまでやってこられたのは、すばらしい、たくさんの出会いで支えられているからだと強く思う。私は時の流れに身をゆだねているだけのように思うが、実は切れ目なくよりよい方向へと周りの皆さんが導いてくださっていたのだと実感する。まさに、京都やきもの倶楽部との出会いもその一つ。「どんな作品を目指したらいいだろうか」「自分の作品はどうだろうか」等々、様々な思いがあったが、京都での出会いで、また一つ世界を広げることができたと思っている。

もう65才。まだ65才! 夢への挑戦は道半ば。 焦らず楽しんで進んでいこうと思う。

最後に、ここまで挑戦してこられたのも、これからの希望を夢見ることができるのも妻の支えがあってこそ。これからも健康でいてくれる事を願いつつ、筆を置きます。

# 私の作品自慢

# 焼き物と人生色々

会員 貝本 龍司

優しくて親しかった露天商のマーちゃんが天津甘栗を1袋手に取って渡してくれる。子供の頃はこれが当たり前のように思っていた。彼のおかげで夜の街でトラブルに巻き込まれることは無かった。小・中学校の頃、0のつく日は近鉄今里駅

前に縁日があり近所の友達と夜はよく遊んだ。特 に好きだったのは親父の付けで食べた串カツで、 ソースをたっぷりと付けて食べたものである。同 級生で親交の厚かったS君は縁日で焼き物店をし ているお父さんの手伝いの為、私とは短い時間し か遊ぶことが出来なかった。それで一人だけほっ ておけないので私も店番を手伝った。これが結構 楽しかったことを覚えている。店の中央奥には結 構高い皿、花器等が並べられ、安いものは店先に 置かれ、店先の小皿、湯飲み等は品物の入れ替え が早かったが、中央奥の品物はいつも同じもので あったと記憶している。今考えれば子供を連れて 遊ばせる縁日に大金を持っていく方はいなかった のでは無いのかと。私が興味を持ったのは同じ品 物が 10 日後には値段が高くなったり安くなった りすることである。品物は磁器が多く陶器は少な かったように思う。焼き物と接する機会は多かっ たものの、作る方法とか作者の思いとかには全く 興味がなかった。しかし、売り買いすることで生 活が出来るということを身体で感じる事が出来た のは私にとって新鮮なことであり、手伝った後に 駄賃を貰って露店でサトウキビ等を買って友達と 食べるのも本当に楽しくて嬉しかった。

私はもともと子供の時から工作は好きで、転勤 で田舎暮らしをしていたこともあり、子供を連れ て遊びに行く所には陶芸の体験教室が結構あった。 そのころは子供と遊ぶのが本来の目的であったの で覗いてはみるものの体験する時間はなく、いつ かは自分も趣味としてやってみたいと思う気持ち があった。当時の仕事は結構激務で超過勤務を毎 月 200 時間以上はした。休日も子供と過ごす時間 は殆どなく、週1回は徹夜の36時間勤務をして いたので、趣味をするような時間の余裕はなかっ た。家に帰って寝ることだけが唯一の楽しみで、 子供も私が家にいるときは遊んで欲しいので私が 休日に家に居ることを楽しみにしていた。仕事の ない日は子供と遊ぶというような日が1年半続き 自分自身の気分転換をする時間を持たないまま、 突然、体調不良になった。今思い出しても人の身 体というものは不思議なもので、会議に出ても人 の言うことが理解できなくなり、咳もとまらなく なって病院での検査の結果、「自律神経失調症」の ため即日入院を宣告され、入院生活が始まった。 広島県廿日市市の国立原療養所と言う山奥の大き

な病院で、治療は朝起きて朝食後、病院内の散歩 道を散歩し東屋で本を読んで昼食、昼からは卓球、 水泳、魚釣り、とにかく気分転換に遊ぶことを勧 められた。自分で言うのもおかしいが、真面目な 私は主治医の言うことを守るようにし、仕事と切 り離された結果、心の中にも遊ぶこともいいなと 思う、子供の頃の記憶がよみがえった。家内から も世間の方の殆どが公務員は遊んでいると思って おられるのだから、それに合わせればいいのと違 うと言われたことと、元々が子供の頃から遊び好 きであったので、自分の人生観に転機を迎えたの もこの時期であったと思う。入院生活は真面目に 遊んだことが良かったのか、わずか1か月で退院 することとなり、入院中に日記として書いていた 「楽しい入院生活の勧め」の執筆を諦め、復職す ることとなった。あと半年も入院していたら話の ネタも多かったので取りまとめた内容で貧乏作家 としてデビューを果たしていたかもしれないと思 うと、1 年後輩の東野圭吾が成功を収めた今はち よっと残念なことであったとも思う。しかし、ゆ っくりできなくなり、入退院を繰り返していたか もしれない。どちらにせよ陶芸教室に通う時間を 持てたことの方が良かったと思っている。

職場復帰は大阪でということで、退院後1週間 で真夏7月に大阪へ着任した。新しい職場は貴金 属を扱う職場で、セキュリティーも厳重で定時間 で退庁しなければならなく、これまでと違い余暇 の時間がありあまる程あった。それと家内からの 勧めもあり、長年やってみたかった陶芸教室の見 学に行くことにした。また、火曜日の午後6時過 ぎではあったが結構生徒の方もおられ、皆さんが ゆっくりとした時間を過ごされているのを見て、 皆さん富裕層の集まりかなともちょっぴり思った のも事実である。ちょうどその日は今井先生(や きもの倶楽部会長)が担当され、気さくに陶芸教 室で話をしていただいたことを 20 年あまりたっ た今も思い出す。皆さんが自由に自分の作りたい 物を作陶している様子を目にし、当時の私には非 常にゆっくりした時間が流れているように感じ、 検討することなく教室の会員になることに決めた。 凝りだすと止まらない性格に火が付き、毎週火曜 日が来るのが楽しみになり、仕事でトラブルもな く問題を解決する必要もなかったので、仕事はほ ったらかしで陶芸のことばかり考えるようになっ

ていた。土の塊が人の手によって命を吹き込まれ、 焼くことにより土自身が変化していくことがとに かく新鮮でワクワクし、土を触っているだけで楽 しく、幸せであったと思う。また、教室に通い始 めて陶芸仲間もでき、教室終了後の酒盛りも楽し い思い出として今も残っている。

清水焼団地ではアマコン大賞を始めることになり、私も参加することにした。第2回で「森の家」で努力賞をいただき、展示してもらえることが本当に嬉しかった。第7回は「雲紋器」で創作部門優秀賞をいただいた。展示に出した作品で今も手元に残っているのはこの2点だけで他は退職祝いとか、新築祝いに友人に無理やり引き取らせた。翌年には転勤することとなり、私が出展したのは第7回アマコン大賞が最後になった。また、陶芸教室も退会することとなった。



第2回アマコン大賞で努力賞を頂いた「森の家」 今も工房に飾ってある。



第 7 回アマコン大賞で創作部門優秀賞を頂いた 「雲紋器」 現在は家の飾りに使っている。

大阪にいる頃、自分の工房を作ってみようと思った。家内に相談すると、「反対してもいつものとおり、自分では作ると決めてるんやろ、思うように好きにしたら」と言われたことで何も考えずにいい気になって My 工房を作ることにした。名前は亡くした長男の一字と私の一字をとって「将龍窯」にした。家内はまた私が仕事に走り、病気にでもなられたら困るのでそのように言ってくれたと今は思っている。



焼き物倶楽部、今井会長直筆の「将龍窯」



My 工房の灯油窯、煙突の配管は自分で 図面を書いて配管工事をプロの方にお 願いした。ちょっとした工夫をしている が、それは秘密ということで…。

善は急げと早速、今井会長に相談し、灯油窯、電動ろくろ、各備品等調達に至るまでお世話になった。おまけに窯開きまで何から何までお世話になり、神事の事を知らない私のために自ら神主姿で工房に来て祝詞を挙げていただき、家族全員、今井会長をはじめ陶芸家の器の大きさに驚いた事を鮮明に覚えている。誠に陶芸とは面白いものである。いや、人間味のある陶芸家が面白いのである。

陶器、磁器との出会いは小学生の頃であった。 社会人になって仕事に追われ、中年になって子供 の頃の記憶がよみがえり、趣味ではあるものの土 で物を作る楽しさを知った私は幸せ者かもしれな い。あの時、病気になり入院したことも、今にな って考えると人生の転換期で良かったことであっ たと思う。おかげで、大病もせず主治医には健康 的なメタボと言われながら定年を迎えることが出 来たことを非常にうれしく思っている。退職した もののまだ年金が出ないので、今年から 5 年間、 月に8日程仕事をすることとなった。休日はでき るだけ工房で過ごそうと思っているが、この年に なると用事がなんやかんやとあり、ままならない。 ただ、出勤する日はちょっと一杯する機会が多く なった。南森町周辺の天満宮の近くか、天満橋で 見かけられたらお気軽に声をかけてください。皆 様の陶芸に乾杯……。

# **陶芸技術/ート**

# ダミの仕方

# 一 下絵付けの色を塗る技法 ―

京都府立陶工高等技術専門校 訓練課長 杉山 雅基

今回、下絵付の工程の中で日頃あまり注目されない骨描き(線描き)の後行う色を塗る技法の「ダミ」について書いてみます。

多くの職場では絵付した人がダミをします。それは当たり前の仕事の手順です。ところが私が絵付師としてデビューしたのは昭和 56 年頃。今では殆ど見かけなくなりましたが、その頃まだ絵付師の多い職場では「ダミ師さん」というダミだけをする職業の方がおられました。

聞くところによると、昭和 40 年代頃までは、 多くの女性は仕事を一生のものと考えない風潮が あったようで、陶磁器の産地では、何年もの修行 時間の掛かる轆轤や絵付よりも仕上げやダミはそ の女性達にちょうど良い仕事の1つであったと聞 きます。その名残の数人がまだダミ師として活躍 されていたのでしょう。

ですから私は、ダミ師という職業の方達が活躍していたのを知っている最後の年代かもしれません。35年位前の話なので名前も思い出せませんが、私の職場にも年配の女性でしたが専属でダミ師さんがおられました。当然、ダミ以外の絵付などはされず、ダミー筋何十年という超ベテランの方でした。

今回、そのベテランのダミ師の方に教えてもらったダミの仕方を簡単に紹介します。

### ■ 先ずダミ筆

はじめてダミ筆を見る方は、筆の太さに驚かれるかもしれませんが、細い筆ではダミがムラだらけになってしまいますので、全国的にダミ液をたっぷりと含める毛量の多い太めの筆を使いますが、産地によって形も使い方も様々のようです。



京都のダミ筆と持ち方



有田のダミ筆と持ち方

例えば有田では京都の筆より毛量の多い太い 筆を使い、京都では軸を立てたり、倒したりして ダミ液の量の調整をするのに対して、有田では毛 の部分を直接掴んでスポイドの様に絞り具合で調 節します。

### ■ 次にダミ液。

基本、骨描きの呉須を番茶で薄めたものを使います。骨描きより若干明るくなるのでダミ液だけ 渋めの呉須を使う場合もあるようです。番茶を使 うのは、ダミの発色がよいのと沈殿を防ぐ為と聞 きます。発色は定かではありませんが、確かに水 では、呉須と水が分離してダミがムラムラになり ます。



ダミ鉢とダミ液

#### ■ ダミの仕方

ダミ液はこぼれ落ちない程度に筆にたっぷり と含みます。

先ず大切なことは、筆先を素地に付けないように液体の表面張力を使い細かく筆を上下にしながら進んで行きます。この時、上下に動かす早さに対して進むスピードが遅く、細かな後が残る程綺麗な仕上がりになります。

もう一つ大切な事は、素地にダミ液を一定の量 を維持する事で、それは筆の軸を立てたり倒した りして調整します。



ダミを行っている時のダミ液と筆先

#### ■ ダミの終わり

ダミの終わりにはダミ液の溜まりが残ります。 そこで最後は筆を倒してダミ液を吸い取るように し、溜まりを残さないようにして終わります。



ダミの最後のところ

以上、簡単なダミの仕方を紹介しましたが、動画ならもっと分かり易かったと思います。

ダミは工程が単純な作業なので絵付のように 高い賃金は貰えなかったと聞きますが、なかなか 経験が必要です。ある意味、絵付師の卵には絵を 描くより濃さを揃えたり、ムラ無くダミをするの は難しいかもしれません。

私ももっとしっかり教えてもらっておけばよかったと反省しながら、若手とはいわれない年代になってしまいました。

いるのですが、空港から眺める景色は以前訪れた時とは随分変わっており、時の移り変わりの速さを感じました。町の人口は 60 万人弱で京都市の人口の約半分程度のコンパクトな町ですが、町の中心部にチャー

ルズ川が流れ、今も創建当時の赤いれんが造りの 建物が並ぶ美しい街です。



ボストン空港から市街地を望む

# 展覧会見聞録

## ボストンと日本美術

陶芸家 今井 眞正

2019 年に京都市とボストン市が姉妹都市提携を結んで 60 周年を迎えます。この機会に両市の芸術文化交流をより深めるため、私の所属する工芸京都が、日本の工芸美術を伝える展覧会を企画しており、その準備のために同じ会に所属している加藤丈尋氏と1週間の予定でボストンに行ってきました。

ボストンはアメリカ最古の都市の一つで、アメリカ東海岸の北部に位置するマサチューセッツ州の州都でもあります。ニューヨークからさらに 1時間程飛行機で北に向かった海沿いの町です。現在、直行便は成田からの JAL のみで、費用の関係から今回は、デルタ航空を利用して名古屋空港からデトロイトを経由してボストンに向かいました。アメリカ東海岸はさすがに遠く乗り継ぎも含め 15時間程かかりました。

ボストンはアメリカの独立にも重要な役割を果たした古い町ですが、現在は近代的な建物が並び、 ヨーロッパの町のような古い街に訪れた感覚はありませんでした。30年程前にも一度この街に来て

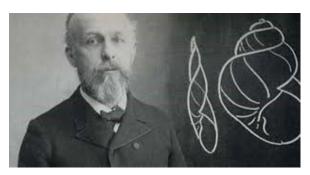


ボストンは海産物でも有名で、とりわけ ロブスターは絶品でした。

厳密にいうと、ハーバード大学やMIT(マサチューセッツ工科大学)があるチャールズ川の北側はケンブリッジという別の町になるのですが、現地の方々もグレートボストンと称してひとまとめに考えられることもあるようです。

このようにボストンには多くの大学があります。単科の大学や総合大学も併せて、100 校以上の大学があるそうです。学生数は 25 万人を超えるそうですが、先に挙げた 60 万人の中にその学生達がすべて入っているかどうかはわかりませんが、人口に占める学生の割合はすごい数です。また大学で教える先生や関係者の数も含めると、町の半分以上が、大学関係者になるのではないでしょうか。

その中で規模の大きいボストン大学は、ボストンで4番目の雇用者を抱える企業?だそうです。 ノーベル賞受賞者もハーバード大学で 50 人弱、MIT では、60 名を超える受賞者を輩出しているようです。最近ではハーバード出身のオバマ前大統領が平和賞をもらわれたのも、記憶に新しいところです。また日本人受賞者もボストンの大学にカウントされていると思いますので、いずれにしても世界の頭脳を輩出した町であることは変わらないと思います。展覧会見聞禄が、ボストン見聞禄になってしまっておりますが、ボストン見聞禄になってしまっておりますが、ボストンにはボストン美術館をはじめ、イザベラ・スチュワート・ガードナー美術館、ハーバード美術館、ハーバード自然史美術館、MIT の美術館等多彩な美術館を有しています。



エドワード・シルヴェスター・モース(1838-1925)

中でも今回は、エドワード・シルヴェスター・モース博士についてお話したいと思います。彼はもともと、貝類を中心とした研究者で大森貝塚を発見したことで有名ですが、日本の民俗学的に重要なものや、日本のやきものを日本中歩き回って収集したことが、日本に残っていないやきものや工芸品、それにまつわる物を残してくれたという意味で重要な役割を果たしてくれました。

その集められた美術品や工芸品は、現在、ボストン美術館、ボストン郊外のセーラムにあるピーボディ・エセックス博物館、等にコレクションとして収蔵されています。その数は余りにも膨大なため一部しか見ることができませんが、明治時代にその強いドルのパワーで買い集めた重要な美術品は、ある意味保全されたということですので、日本にとってもありがたいことだったといえるのではないでしょうか。返していただければ、なお



ボストン美術館日本美術のコーナー

ありがたいのですが…。

ボストン美術館では、日本のコーナーにそれらの一部が展示されていました。平安時代の仏像や、鎌倉時代の仏像等、日本にあれば国宝に指定されてもおかしくない作品が、日本の空間意識を大切にした展示方法で展示されていました。 やきものもいろいろな時代のものが展示されていましたが、今度機会があれば、収蔵庫にあるものを拝見したいと強く感じました。またコネを作らないと…

モース博士は、私の出身校である東京藝術大学 設立についても重要な役割を果たされたと聞いて います。当時東京帝国大学で教鞭をとっていたモ ース博士は、セーラム出身の哲学者のアーネス ト・フェノロサを東京帝国大学に招聘し大学の基 盤づくりに貢献しました。フェノロサ博士はもと もと美術の専門ではなかったのですが、岡倉天心 らとともに欧米を歴訪し、日本の美術教育のイン フラを整えるべく、東京藝術大学の前身である東 京美術学校の草案を作り上げました。

このようなことからもボストンにある日本の美 術品の収集にも、これらの日本の美術の中心とな る人たちが関わっていた事は明白だと思います。 モース博士は、日本への貢献がたたえられ、1898 年に勲三等旭日章、1922年に勲二等瑞宝章を綬与 されたそうです。

今回のボストン訪問では、スケジュールが過密

でピーボディ・エセックス博物館には訪れること がかないませんでしたが、またの機会にぜひ行っ てみたいと思っています。

最後に、本来の目的である展覧会の開催企画ですが、ボストンジャパンソサイエティーの皆さんや日本総領事館、ボストン市のご協力で、2019年にボストン大学のギャラリーで展覧会をさせていただくことになりそうです。今から準備が大変だと思いますが良い展覧会にしたいと思っております。

機会がありましたら、倶楽部でもツアーを組ん でボストンに行くのもいかがでしょうか?



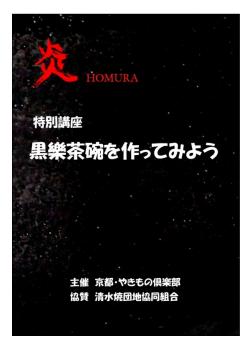
ボストン大学 (BU) ギャラリーにて

# 活動報告

### 黒楽茶碗作品図録の発行

本年2月4日と26日の2日に亘って特別講座「黒楽茶碗を作ってみよう」が開催された。その様子については会報21号で報告した。今回も昨年の「赤楽」と同様に記念として図録を制作することとなり、少し時期が遅れることになったが、6月にようやく発行することが出来た。内容については、倶楽部以外からの参加者も含め、制作された24作品を収録するとともに、「成形」、「削り」、「施釉」、「焼成」の各工程の制作現場の写真も付け加えたので、今後の楽茶碗作りの参考にしてい

ただきたい。図録の配布に関しては本行事に参加 された方々の内、希望者全員に無償で配ることが できた。



楽焼図録 (A4版 12頁)

## 綾部妙徳寺の穴窯焼成体験を実施

京都・やきもの倶楽部理事(前会長)、森田隆司 先生の主催された綾部妙徳寺にある穴窯を使った 作品作りに、会員からも参加を募り、穴窯体験行 事とした。実施の内容については、倶楽部通信 2017-2号に掲載されており、また本会報の"陶芸 家のひとりごと"欄には森田先生執筆の詳細な記 述があるので、そちらをお読み頂くこととし、こ こでは実施日程と参加者数のみを記すことにする。

#### 焼成作業日程

窯詰め4月30日窯焚き(あぶり)5月1日~3日窯焚き(せめ、ねらし)5月4日窯出し5月13日

参加者数

作品制作 11 名現地体験 9 名

さらに、本行事においても図録"穴窯への挑戦"を発行した。行事参加者には有償(1冊1,500円)で販売した。



穴窯図録 (A4版 25頁)

# 会員便切

## 個展・グループ展・企画展・公募展 (平成29年4月 ~ 平成29年9月)

京都・やきもの倶楽部に所属されている方々の展覧会で、機関誌「倶楽部通信」に掲載されたものをまとめています。会員各位の活動状況をお知らせするために設けました。掲載希望の方は、どのような規模の展覧会でも結構ですので、ふるってお申し込み下さい。用紙は、すでに配布いたしました「展覧会情報」掲載申込書(保存版 2017/8)をご利用下さい。

### 平成 29 年

■ 2月17日 ~ 3月26日 <u>京都工芸の精華2017</u> たけはら美術館(広島県 竹原市) 今井 眞正、加藤 丈尋

- 3月7日 ~ 3月23日 <u>京展 2016</u> 京都市美術館(京都市) 玄 平 (入選)
- 3月17日 ~ 3月20日 京都市産業技術研究所創設100周年記念 伝統産業技術後継者育成研修 手描友禅・陶磁器・漆工合同作品展 京都市勧業館みやこめっせB1F 第1展示場B(京都市) 森田 隆司
- 4月13日 ~ 4月23日 <u>京都工芸の精華 2017 小品展</u> 生活あーと空間 ぱるあーと (京都市) 今井 眞正、加藤 丈尋
- 4月13日 ~ 5月14日 京都工芸の精華 2017 中信美術館(京都市) 今井 眞正、加藤 丈尋
- 4月19日 ~4月24日 2017年 第56回 日本現代工芸美術展 東京都美術館(東京都 台東区) 森田 隆司
- 5月9日 ~ 5月14日 2017年 第56回 日本現代工芸美術展 京都市美術館 別館(京都市) 森田 隆司
- 5月9日 ~ 5月15日 第46回 日本伝統工芸近畿展(大阪展) 大阪府咲洲庁舎 2階 咲洲ホール(大阪市) 吉田 貢(入選)
- 5月12日 ~ 5月16日 第7回 宮崎まさのり 切り絵象嵌 陶展 ギャラリー 象鯨(京都市) 宮崎 正制
- 5月17日 ~ 5月28日 第39回 日本新工芸展 国立新美術館(東京都 港区) 和田 真理子(入賞:日本新工芸賞(特賞))
- 5月24日 ~ 5月29日 第46回 日本伝統工芸近畿展 (京都展) 京都高島屋 7階 グランドホール (京都市) 吉田 貢 (入選)

- 6月7日 ~ 6月13日 <u>一華やぐ貌― 陶・今井眞正展</u> 京都高島屋 6階 美術画廊(京都市) 今井 眞正
- 6月8日 ~ 7月28日 第7回 国際著名作家招待展 上海芸術禮品博物館(中国 上海市) 今井 眞正
- 6月13日 ~ 6月18日 <u>第66回象(かたち) 同人会</u> 京都府立文化芸術会館1F(京都市) 森田 隆司
- 7月4日 ~ 7月9日 <u>第18回 陶集団あすなろ展</u> ギャラリー中井(京都市) 根本 都男
- 7月5日 ~ 7月11日 <u>一華やぐ貌― 陶・今井眞正展</u> 横浜高島屋 6階 美術画廊(横浜市) 今井 眞正
- 9月5日 ~ 9月11日 <u>今井政之の藝術と今井家三代展</u> <u>一 受け継がれる情熱 —</u> 福屋 8階特設会場(広島市) 今井 眞正
- 9月27日 ~ 10月3日 <u>市川博一 作陶展</u> 高島屋大阪店 ギャラリー NEXT (大阪市) 市川 博一
  - ※ 会報前号に掲載が間に合わなかったものに ついては本号に掲載しております

### 凡例

■ 開催期間 展覧会名 展覧会場(開催地) 出品者名(入選、入賞)

# 編集後記

今回の編集後記は書くことが何一つ浮かんで来ません。パスしたいという心境ですが、1回サボると次も無いということになりかねません。

そこで、陶芸教室で私の体験してきた造形方法 の変遷について述べることにします。

#### ① ロクロ

最初から電動ロクロで始まりました。失敗したら団子にして積み上げておけば、次の日には真空土練機で練り上げられているので、労力は入りません。作っては潰し作っては潰しの連続でしたが、次第になれてくると、回転対称の形は大概のものができるようになりました。しかし、何かしら物足りなさを感じ始めました。

#### ② タタラ造り

板を作るのは手製の圧延機が置いてあり、粘土をブロックのまま引き延ばすだけですので、これも労力は入りません。板と板をそのまま形に切って繋ぎ合わせるのは簡単です。小さな作品なら、多少のゆがみも入れることはできますが、大きくなると、焼くときには必ずと言って良いほどに割れが生じてしまいます。これでは嫌気がさしてきます。

#### ③ 中削り

大きくても長い棒状のものは、断面が丸であろうと角であろうと、土をそのまま捻りだして、好きな形を作ります。後は長手方向に二つ割りにし、中だけを削り取って引っ付ければ、出来上がりです。 管物はできても、バルクはできません。

#### ④ 紐作り

結局これになりました。陶芸を始めて十数年になりますが、今まで一回もやったことのない紐作りが万能であることがやっと判りました。どんな大きさのどんな形でも作れると確信しました。今抱えている問題は、"作りたい形が最初から頭に描けない"ことです。今回の作品展は上手く焼けましたら、これで行きます。

全く編集後記から外れて変種後記となってしまいましたが、最初に言った理由でお許し下さい。

(編集委員 片岡俊彦)

京都・やきもの倶楽部 ホームページトップに戻る